俳句

川口重美（かわぐち しげみ）

下関市・山口市

（1923～1949）

【著作】

『川口重美句集』
（昭和38年8月30日・発行者　川口逵仁）
『川口重美句集　復刻版』
（平成20年10月・発行者　「山繭」発行所）

川口重美は大正十二年下関市に生まれた。姉一人、兄三人、妹一人の六人兄弟。小学校、中学校を下関市で過ごす。幼少時から眉目秀麗、成績は抜群であった。習字と絵もすばらしくうまく、妹は宿題を手伝ってもらうものの上手すぎると先生にわかってしまうので、「下手に書いてね、下手に書いてね」と頼んでいたという。「重美ちゃんのように」というのが親戚の親達が子どもに与えた目標であった。

高校は山口市の旧制山口高等学校に進む。下宿先の女主人吉賀トラを母のように慕い、トラもまた重美をかわいがった。山口を第二の故里として愛し、学徒動員先の長崎から返された時も下関を素通りして山口へ帰ったほどである。

山高時代の昭和十九年夏頃、若い配属将校の夫人から俳句の手ほどきを受け、初めて句作する。同年九月、高校を卒業し、東京帝国大学第二工学部建築学科に進む。本人は文科志向だったようだが、徴兵が免除される理科、理科の中でも芸術的な建築を選んだのではないかと思われる。

句作を始めて後、俳誌『風』、『寒雷』、『万緑』、『しぎの』等へ投句する。『風』への初投句は昭和二十一年七・八月号で一句が掲載されている。「風」は沢木欣一を主宰とする金沢拠点の俳句結社であった。号を追うごとに重美の掲載句数は増え、ほどなく巻頭を飾る。昭和二十四年三月号で重美を含む四名が新同人に推挙されるが、重美はその号を見ることなく二十五歳という若さで自ら命を絶っていた。三年半の実に短い期間であったが「陰影の鋭い、熱っぽい吐息のような」作品は誌友その他の俳人たちに強い印象を残した。若者に特有の熱っぽさを持ちながら、完成度の高いすぐれた俳句作品の数々。まさに「天才的な閃きを見せて消え」ていった俳人である。

作品は、手書きによる句帖『Stray Sheep Ⅰ』、『Stray Sheep Ⅱ』ほかがあり、重美の端正な文字で一二〇〇句余りが記されている。これらは遺言により俳句と学校の後輩であった上野五郎氏（俳号・燎）に託された。その後、上野氏から山口県立大学郷土文学資料センターに寄贈されている。没後十四年目に上野氏ら親交のあった友人や遺族の手によって句帖の全作品から三百句が選ばれ、『川口重美句集』が刊行された。重美自身の手により抹消されていた句もあったが、選者の判断により佳句は収録された。

評伝としては、『風』昭和四十年三月号二百号記念特集に掲載された沢木欣一による「川口重美聞き書き」が詳細である。昭和五十年九月に山口市で発行された『単騎の会詩誌第3号』でも川口重美特集が組まれており、参考文献等よくまとめられている。

最後に若き日に重美と上野氏の間で交わされた会話を紹介する。上野氏が問う「俳句とは何だい」、重美「詩だよ」、重ねて問う「詩とは何だい」、一瞬置いて答える「詩とは驚きだよ」。

（文・杉山みゆき）

自筆句帖

『Stray Sheep Ⅱ』

『Stray Sheep Ⅰ』

句碑風景